
夏蜜柑

紅蘭リト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏蜜柑

【Zコード】

N1473F

【作者名】

紅蘭リト

【あらすじ】

『風夜』の曲を聞いて僕は救われた。 真面目な静が音楽によって知ること。 それは…夢。

『 今夜最後のお便りはペンネームらむさんからです。最近、私は失恋しました。落ち込んでいるときにこの曲を聞きました。暖かくなんだからほつとしました。他にも出会いはあると、前向きに行こうと思っています。

そうですね、きっと出会いにはたくさんあります。

頑張ってください。

私からの応援を込めて、

らむさんのリクエスト、

風夜の

「 大空へ… 」

【 僕の声が聴こえないの？ それでも君の名前を呼び続けるよ。愛しい君へどんな事があるうと守り続けるよ。だけど、君が独りで飛び立つのなら、僕は別れを言うよ。君が愛しいから君に笑っていてほしいから。だから、『 わよなら 』を言つね？】

僕は意味不明なこの曲に耳を傾けながら、机にくいついていた。

夏期講習最後のテストで思うような点が取れなかつたのだ。

難しい問題をじつと見つめていたが、それだけで分かるなら苦労はない。気晴らしにと、じいちゃんから貰つた古いラジオを取り出した。

すると、この曲が聴こえてきた。

好きなら、どうしてよならすんだよ？

どうして、守るんじゃないのかよ？

この曲を聞いて思った。

もともと音楽はそこまで好きじゃなかった。
でも、好きな曲がない訳でもない。

ただ一つ言つとすれば、この曲は嫌いだ。

「ねえ、ふーやの新曲聞いた！？超良い曲じゃない？切ないけど、
なんか暖かくてさあ。」

「分かる！」

「ふうや？」

「ああ、あの風夜か。

学校では、みんなあの曲の話をしていた。

僕と同じでラジオで聞いたのか、それとも、テレビがなんかで聞いたのかも知れない。

何にしろ、僕と考えが違う人があの曲を好きになると云つだけなのだろう。

「よう、静ちゃん。機嫌悪いん？」

明るい金色の髪が風に靡く。

「静ちゃんって呼ぶな。」

こいつ、山根嘉理はへラへラ笑いながら僕の机に座った。

こいつと同じレベルの授業を受けていると考へるだけでイライラする。

何も努力してないくせに、遊ぶために学校に来て。

ふざけるな。

僕がどれだけ勉強していると。

笑わせるな。

僕はお前等とは違う。

「んじゃ、久崎静くん。今、話題になってるバンドはなんだ?」
何を言い出す。

可哀想な頭で。

「知らない。」

山根はニヤリと笑った。
「風夜。だろ? ふうや。」

「どいつもこいつも。」

それしか言えないのか。

そこまで、可哀想だつたか?

「じゃーん!」

ヒラヒラと紙切れを僕の目の前にだした。

「なに?」

「風夜のライブチケット。行かね?」

は?

なんで僕?

「意味不明。別に誘う人いんだろ?」

「だから、だよ。俺さ、風夜がアマチュアの時から知ってるんだよ
な。だから、風夜に興味ない人がスゲーむかつく。」

だからお前を誘うんだよ。

誰が何が好きであろうと関係ないだろ?

「行かない。興味ないのに行きたくない。」

「興味出るかも知んないだろ。」

勝手に決めてんなよ。

「風夜スゲー好き。お前も好きになつてほしいってやつ?」
イラつとして、僕は教室を出た。

わがまま?

自己中?

どれも違う。

あいつはあえて言つならば、能天氣。チャイムがなり、放課後の訪
れを知らせた。

放課後の図書室に行くと、雑誌が忘れたのか置いてあつた。
最近の音楽雑誌。

誰のか分からぬがページをめくつた。

そこには大きく『風夜』と書かれていた。

真ん中には髪を高い位置で結つた大きな目をした女の子がじつと此
方を見つめていた。

なんだこの子は?

心臓がドクンと波打つのが分かる。

目の前が真つ白になり、そして暗くなる。

蛇に睨まれたように体が動かなくなつた。

冷や汗が流れた。

はつとすると、女の子が微笑んだように見えた。

その女の子を囲むようにして、顔の整つている三人の男の子が立つ
ている。

これが『風夜』。

初めて顔を見た。

1人1人が個性的で、オーラをまとっている。

風夜は1人1人にきっと、才能というものがあるのだろう。努力もそれなりにしているのだろう。

努力が好きな僕でもそれでも、僕は風夜の音楽を良いとは思えない。それは、僕の育った環境にも影響していく。

良いとは思えないとは言つたものの、本当はゆっくりと風夜の音楽を聞くのが怖いのかも知れない。

僕はフツと軽く笑つた。

たまには、良いかもな。

教室に戻ると山根が鞄に教科書をつめていた。

「おい。」

「静ちゃん?」

また、ちゃん付けかよ。と、ため息をつきながら山根を見た。

「ライブ…行つて…やるよ。」

山根は目を見開いた。

そして、人懐っこい笑顔をみせ、チケットを僕に差し出した。

家に帰ると当たり前のように、誰もいない無駄に広い。ネクタイを緩め、僕は勢い良くソファーにもたれた。

久しぶりと言つて良いほど、少しホコリ被つたリモコンでテレビを付けた。

激しい音楽が流れ、思わず耳をおさえた。

テレビをゆっくり見ると、雑誌で見た女の子が歌つていた。僕は引き込まれていくのが分かった。

【 yōu? 私はちっぽけで自分を見つめると崩れ堕ちて行った。天使のように美しく。悪魔のように強く。闇と光は隣り合わせだけど、歌を歌い、知らせよう。私は此処にいるよ。】

『飛翔』と言つ曲をしんみりと歌いあげた女の子はギターの男の子の肩をポンと叩いた。

漆黒の髪をなびかせた。

僕はチケットをギュッと握りしめた。

机に向かつて、教科書を開けた。
勉強開始。

なんだかんだ言つたつて、僕も周りの人と同じで風夜に夢中になつていたと言つことだな。

我ながら可笑しいな。

僕の部屋のドアがゆっくり開いた。

「勉強はかどつてますか?」

ソプラノの声が僕に話しかけた。振り返ると母さんが立つていた。

「今日…早くね?」

「仕事が早く終わったの。」

どこかの大きな企業で働いてる母さんに、医者でそれなりの位についている親父。

金はそれなりにある家庭に生まれ、楽しいこともなにもない、ただ

そのぶん厳しく育ってきた。

勉強が出来ればなんでも出来ると教えてられていた。

人間は独りなのだと、だから友達なんか作るなと言われ続けた。仲が良い友達なんて居なかつたし、机に向かってじっとしているのが僕の生活でもあった。

普段厳しい顔ばかりしている両親も良い点を取ると

「良くやった」と褒めてくれた。それだけが嬉しくて今もずっと勉強をし続けている自分がいる。

それが苦痛で自由になりたくて…

それでも、何かを求めて勉強をし続けている。

風夜のライブに行く。

それは初めての両親と自分に対する反抗だ。

「おー。山根ー。」

ライブ当日、山根は30分遅刻で待ち合わせ場所にやつてきた。

「悪い。昨日、興奮して寝れんかった。」

山根はニヤリと笑った。

「つぎけんな。」

山根は僕の頭を軽く叩き走り出した。

「何すんだよー！」

「急ぐぞ！時間おしてるからさ。」

「お前が遅れたんだろー！」

急いでバスに乗りこんだ。

「静つてさ、最近変わったよな？」

僕は、ダルそうに隣に座っている山根を見た。

「そうか？」

「そうだよ。毎日独りで勉強してる暗い奴だったのにさ、今は凄い

話すようになったし?」

「それは…お前が話していくるから。」

山根は僕の額を小突いた。

「違う…だろ? 本当は今みたいに面と話したいんじゃね? 今は本当のお前でいる。って言つかさあ。」

本当の僕?

意味が分からない。

でも、独りは怖かった。

皆がコソコソ話してると、僕の事を言われてる気がして。独りは大丈夫だと、一匹狼でいたけど、本当は独りは嫌なのに。強がつてしまつて。

山根が話しかけてくれて、慣れないながらも話す事が出来て。風夜を見る事が出来て。

「うぜえ。何も変わつてねえよ?」

「…ありがとう…な…?」

「ん? 何か言つた?」

僕は小さく呟いた。

ありがとう。

勉強ばかりの僕にはこの世界は無知で、苦しくて。

勉強さえ出来れば何でもわかると思つていたけど、逆に何も分かつていなかつた。

今流行りの曲。

人気の芸能人。

友達と何気ない話をする事が何よりの『世界』だと思つ。

「何でもないよ。」

ライヴ会場は大きなドームだった。

人が多く人混みに酔つた。

周りの人たちは、風夜のコスプレや団扇を持ったりと、ライヴに合つた格好をしている。

どう考へても僕は浮いてる。

クソ真面目な服装に、秀才とでも言つような髪型に眼鏡。

普段は、服装なんて気にしなかつたが、今の流行りを見せつけられる。

「どうした？ 中に入るぞ。」

山根は僕の何かを察したのか半ば強制的に会場へ入った。

「どうする？ グッズ買う？」

僕は静かに首を振った。

何をしにここまで来たのだろう。普通、ファンならグッズを大量に買ひ占めるのだろう。それなのに僕は…。息抜きに？

反抗に？

普通の人になりたくて？

どれもどこか違つて。

ステージの電気が急に消える。

歌声が静かに聞こえて来た。

ステージの上からワイヤーでつられて、空を優雅に飛びながら漆黒の髪の少女は歌つていた。

周りからは歓声が上がり、『ニイナ』と言つ声が聞こえた。

「本物のニイナだ…。」

山根も興奮気味に呟いた。

漆黒の髪の少女、ニイナは綺麗に着地すると青い衣装をはためかせ、一礼した。

「盛り上がって行ー！ー！ー！」

ニイナは大声で叫んだ。

「ギターのー？」

『^{なみ}波風！ー！』

ニイナの声に合わせ、

観客は名前を呼んでいく。それに合わせ、風夜のメンバーが登場していった。

一曲演奏され、

また一曲演奏される。間に何か話をして、また演奏される。

周囲も声が枯れるまで叫んでいる。

だけど、僕は体が動かず、声も出ないで、

ただメンバー一人一人を見つめた。

なんて乗りの悪い客だろう。そう思われたにちがいない。

だけど、体が硬直したように動けなくて。

ただ、見つめる事しか出来なかつた。

自然と涙が一筋頬を伝つた。

叫びたい。

声が出ない。

笑いたい。

頬が上がらない。

この世界は、理想に埋められている。

誰が好きとかそんなのも理想で、結局は自分が一番可愛いんだ。理想が理想が生む。

それに耐えるのが苦しい。

風夜の歌詞は僕の中に入ってくる。痛いほど。

甘く切ない。

ただそれだけのこの歌詞に理想に入っている。
だから、風夜を見つめているのかもしれない。

隣をふと見ると山根も泣いていた。

泣きながら、周りがうるさくて聴こえなかつたが何かを叫んでいた。
あまりにも、それが衝撃的で僕は目を見開いた。
何に驚いたかはわからない。自分だって泣いてる。
なのに、衝撃的だった。

「ありがとーーー！」

「イナが叫んだ。

それで我に戻つた。

一人一人何かを言つて頭を下げた。

皆が涙していた。

「イナも泣いていた。

その涙があまりにも綺麗で僕は、じつと見つめた。

「どうだつた？来て良かつたろ。」

会場から出ると山根は僕に問いかけた。

涼しくなつていた夜は何処までも続くよつた静けさがただよつていた。

「うん、そうだな。来て良かつた。ありがとー！」

「え！？」

「なんだよ。」

山根は大声を出した。

「今、ありがとうって！俺に言った！？」

「ああなあ？」

山根が騒ぐ。まくまく。

例えば空を飛べたとしたな。

そしたらきっと気持ちが良いのだ。

例えば海の中で生活出来たなら。

そしたらきっと静かに生きて行けるだ。

何にもわからない。

実際はどうなのかわからない。

それでも夢を見たいじゃないか。
だから、笑おうじゃないか。

生きるのに苦しくなつたら楽しい事を見つけよう。

僕は風夜を知つて

周りの事を知れた。

だから、楽しい事をしたい。

笑つて笑つて笑つて

しょつもない事をして笑い転げて。

苦しさんで苦しさんで苦しさんで

どうしようもない事で泣き叫んで。

涙が枯れるほど泣く。

少しあはみになるだ。

だからや、

自分自身を見つめて

自分自身を愛して
大丈夫だと言い聞かせ
前を向こう。

【明日、笑える力ナ？明日、信じられる力ナ？夢を見つめそれが勇
氣となるよ。自信が持ちたくて、自信を手に入れたくて。ただ光
を見つめようよ】

(後書き)

まず読んでいただきありがとうございました。文章力がなく読みにくく、何を伝えたかったの?と思われたかもしれません。ただ、私が伝えたいのは一つだけじゃなく、周りを見つめてほしいと言う事です。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1473f/>

夏蜜柑

2010年11月21日03時38分発行